令和６年度　学校経営計画・自己評価書

足立区立足立入谷小学校
校長　信田　恵介

１　学校教育目標

人間尊重の精神を基調として、一人一人の児童を大切にし、自己肯定感を育む教育を推進することで、社会に貢献できる心身ともに健康で知・徳・体のバランスの取れた人間性豊かな児童の育成をめざす。

○　やさしい子　　○　がんばる子　　○　げんきな子

２　めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	～児童・保護者・地域から信頼され愛される学校～ ・基礎学力が定着し、豊かな心が育ち、いじめを許さない学校　　・全教職員が創意を発揮し、熱意と誠意をもって、協働している学校 ・家庭、地域、異校種、関係機関等と連携し、安全・安心で開かれた学校
○児童・生徒像	・「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」が育まれ、将来の社会を生き抜く力の基礎が育っている児童 ・互いの気持ちを思いやり、人権を尊重し、規範意識をもった児童　　・進んで運動に親しみ、心身を鍛える健康な児童 ・大きな夢をもち、自分の課題を最後までやり遂げる児童
○教師像	・教師としての使命感・熱意・愛情をもち、社会性に富んだ教師 ・児童にとって、楽しい授業、よく分かる授業、主体的に学ぶ授業を工夫できる教師 ・安全、安心に配慮し、子ども一人一人を大切にした教育を推進する教師 ・保護者や地域の人々と連携し、児童や保護者、地域から信頼される教師

３　学校の現状及び前年度の成果と課題

（１）学校の現状

【児童】児童数の減少による人間関係の固定化が懸念されるが、素直で穏やかな児童が多く、仲良く、協力し合って生活している。他学年との交流も多く、学年の枠を越えて友人関係が築けている。学校では学習を真面目に取り組み授業中も落ち着いている。学校・学年行事等で代表児童となる機会が多く回ってくるので、皆の前で発表することに対する苦手さが克服できている。また、読解力や自ら考え表現することと、家庭学習の習慣化等の課題が克服されつつある。ICT 機器の取扱いには抵抗感がなく、１年生から全員が AI ドリルや、グーグルクラスルームを使いこなしている。朝の遅刻が多い。

【教職員】学級担任の多くが教職 10 年未満の若手教員であるが、自らの職務に責任をもち、自己研鑽・啓発に努めている。少人数のため、学級担任以外でも全校児童の実態を把握しており、直接児童に話しかけたり、一緒に遊んだりする場面が多く見られる。

【保護者・地域】学校の教育活動を温かく見守ろうとする保護者や地域協力者が多く、教員も保護者から励まされることがある。一方、教育に対する関心や基本的な生活習慣の定着に関しては、各家庭事情もあり差が大きい。保護者会への参加率は低いが学校行事や授業参観等には進んで参観している。

（２）前年度の成果と課題

・区調査の結果では、昨年度比で、通過率が国語 4.2Ｐ、算数 11.1Ｐ、正答率が国語 7.1Ｐ、算数 6.6Ｐと大きな上昇が見られた。要因として、日々の授業へ取り組む態度改善と、自ら問題を見出し解決する児童を目指した校内研究による教員の指導力向上が考えられる。観点ごとに見ると「書くこと」に関する正答率が全国平均を下回っており課題となる。「家庭学習を充実させること」で学習習慣を定着させること、「短作文の取組を定着させること」で語彙力や学んだ漢字の活用をさせ、書く力と読解力の向上を図ったが、学年による取り組みの差が出てしまった。

・文部科学省リーディング DX スクール事スクール事業連携協力校として、１年間研究を進めた結果、AI ドリルの活用、ICT を活用した授業、クラウド機能を活用した校務改善等での成果があった。

・通塾率の低い本校においては、校内での計算・漢字検定が有効に活用され、学習習慣の定着、学習意欲の向上、基礎的基本的な内容の理解につながった。

・校内研究を理科・生活科に絞り国立教育政策研究所教育課程実践検証協力校に指定されたことで、教員の授業力向上につながった。

・心と体の健康づくりについては、オリンピックタイムや、持久走、短縄、長縄等の取組を計画通りに実施することができた。

・「学校で朝ごはん」等の特色ある教育活動の充実を図り、体力向上を目指すとともに、健康教育や食育を継続していく。

4　重点的な取組事項

	内　　容	実施期間（年度）　R:令和				
		R4	R5	R6	R7	R8
1	学力向上アクションプラン	◎	◎	◎	◎	◎
2	教員各自の専門性の向上	◎	◎	○	○	○
3	心身の健康づくり	○	○	○	○	○

5　令和６年度の重点目標

重点的な取組事項－１　学力向上アクションプラン

Ａ　今年度の成果目標	達成基準 （目標通過率）	実施結果 （通過率結果）	コメント・課題	達成度 ◎○△●
①「読む力」「書く力」「ごく理解」「計算力」等基礎学力の育成 ②主体的に学習に取り組む児童の育成	①区調査（４月）の通過率 国語 80%、算数 80% ②家庭学習の定着率 70%	①区調査（４月）の通過率 国語 79.2%、算数 82.4% ②家庭学習の定着率 前期 82%、後期 81%	一体的な取組を通して、目標とした水準を達成することができた。学びの個別最適化をさらに徹底するとともに、学びに向かう力を育む取組の充実に努めていきたい。	○

Ｂ　目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 （誰が、何を、どのように）	達成確認 方法	達成目標 （＝数値） （いつ・何を・どの程度）	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 新規拡充	漢字・計算検定の実施	全学年 国語・ 算数	年間８回（漢字・計算各４回）	各学年の学習内容を修行編としてプリント配布半月後に検定実施、全問正解するまでフォローアップ	１回目の受験で満点を合格として合格者の割合を毎回算出	全学年平均 70%以上	「Ａ☆Ｉ検定」として再構築した上で実施 満点合格者の割合 １年 76%、２年 65% ３年 70%、４年 76% ５年 74%、６年 66%	満点合格のハードルは高かったが、児童のモチベーションを確実に高めることができた。検定前の働き掛けを充実していきたい。	○
2 継続	宿題以外の家庭学習の充実	第２学年以上 全教科	年間（第２学年は後期から）	家庭学習の習慣化と興味ある学習等で「自ら課題設定し追究する力」の育成 ・宿題とは別に自ら考えた課題で家庭学習を行う ・模範となる自習ノートのデータベース化	①各学年の模範事例をデジタル化してフォルダ管理 ②児童アンケート	①10 月までに全学年 10 例以上を掲載 ②家で宿題以外の勉強をする児童 70%	①各学年とも模範事例を 10 例以上掲載 ②家で宿題以外の勉強をする児童（第２学年以上） 前期 55%、後期 54%	校内掲示や Google Classroom による啓発の成果は表れている。家庭学習の内容・方法等の質の向上を図りながら、より多くの児童の習慣化を図りたい。	○
3 継続	AI ドリルを核とした ICT 活用の推進	全学年 全教科	通年 特に算数授業と家庭学習で	全児童が日常的に AI ドリルを活用して知識技能面を重点的に学習（特にデータ蓄積も兼ねて、家庭学習を含めて積極的に活用）	週１回以上担任が点検	算数で AI ドリルを全児童が活用し、強化月間で平均 400 問以上	強化月間は設定しなかった 10～12 月に算数で 360 問以上活用した児童の割合 57.0% 児童１人あたりの月平均活用数 142.1 問	１、２年では児童対象の出前研修会を実施したことで活用を促すことができた。進行管理を徹底し、活用の日常化を図ることが課題である。	○

4 継続	全学年による英語学習の継続	全学年 英語	通年 低学年 10 時間	第１、２学年は指導計画に基づき外国語ＡＤと協働で授業を実施 小中連携で TT 授業を実施	年間計画に基づいて実施	第１、２学年において年間 10 回以上の外国語授業を実施	第１、２学年において年間 10 回以上の外国語授業を実施	第２学年終了時の児童の姿を明確にするなど、年間の系統性をより明確にして「力」をさらに育んでいきたい。	◎
5 継続拡充	作文タイムの実施	全学年 国語	６月までに週１回以上	パワーアップタイムの時間を活用し、低学年 50 文字程度、中学年以上 100 文字程度の作文を毎週実施（第１学年は７月から）	９月から 12 月のワークテストのうち国語「思考・判断・表現」の正答率	第２学年以上で 80%	９月から 12 月のワークテストのうち国語「思考・判断・表現」の正答率が第２学年以上で 84.7%	計画通りに全校で実施する一方で、手本となる作品を学校放送や Google Classroom で紹介するなどの取組も行った。今後も文章表現力と書くことに対する前向きさを高めていきたい。	◎

重点的な取組事項－２　教員各自の専門性の向上

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
①全教員が児童主体で学ぶ問題解決型の授業を展開できる ②全教職員が ICT のスキルを高め、日常的に活用できる	①区調査で「学校での授業はわかる」と回答する児童 90%以上 ②ICT 機器を活用した授業を低学年週５時間以上、高学年 10 時間以上	①区調査で「学校での授業はわかる」 87.9% （アンケート前期 93%、後期 93%） ②ICT 機器を活用した授業を低学年で平均週５時間以上、高学年で週平均 10 時間以上実施	概ね 90%の児童が授業はわかると回答している。ICT 活用の質を高め、指導の個別化と学習の個性化をさらに推進していきたい。	◎

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
AI ドリルの活用	活用強化月間の活用数が第３学年以上の平均が 500 問以上	・キュビナで全教職員がドリル作成できるように６月までに研修を実施 ・サマースクールで、全学年が３日以上キュビナを活用	強化月間は設定しなかった 10～12 月に国語・算数合わせて 450 問以上活用した児童の割合（１～５年）58.1% 児童１人あたりの活用数 129.4 問	よりコンスタントな活用を浸透、取組の個人差の是正、児童の主体的な活用の促進が課題である。	○
児童主体の問題解決型授業を展開（各教科）	児童が自ら問題を見いだし、解決する授業を生活・理科で実施（低学年３単元以上・高学年６単元以上）	・校内研究会で授業研究を６回以上実施 ・２月までに３年間の研究の成果を共有	児童が自ら問題を見いだし、解決する授業を１、２年は生活科の全単元、３～６年は理科の全単元で実施するなど、各教科で授業の充実・改善に努めた	生活科・理科の校内研究を継続的に行ったことが、確実に学校全体の授業観の共有化につながった。	◎
ICT 機器を活用した授業改善・校務改善	①ＩＣＴ機器を活用した授業を低学年週５時間以上、高学年 10 時間以上 ②校務でのペーパレス化で紙 30%削減	・各学年で活用する汎用性のあるアプリ一覧表の作成 ・職員会議、研修会で教職員クラスルームの活用	①ICT 機器を活用した授業を低学年で平均週５時間以上、高学年で週平均 10 時間以上実施 ②校務支援システム・Google Classroom の活用等によりペーパレス化で紙 30%削減を達成	教育活動、校務の両面で積極的な活用を推進することができた。活用の質の向上と日常化のさらなる促進を今後の課題としていきたい。	◎

重点的な取組事項－３	心身の健康づくり

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
①「投げる力」を中心に、体力の向上を図る。 ②いじめ防止の徹底と早期発見、早期対応、早期解決、深刻ないじめの根絶	①「ソフトボール投げ」の東京都Ｔスコアを第３学年以上で男女とも 47 以上 ②４か月以上継続するいじめの件数が０	①「ソフトボール投げ」の東京都Ｔスコアが第３学年以上で 47 以上は３年女子と４年男子のみ ②２月時点で４か月以上継続しているいじめは０件	いじめ対策については、組織的かつスピード感のある取組を推進することができた。	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
オリンピックタイムの充実	・体力調査で全学年男女全種目（96 項目）のうち 50%(48 項目)以上が都平均以上	・オリンピックタイムで実施している種目の見直し（４月） ・11 月持久走の取組、12 月短縄の取組、１月長縄の取組	・体力調査で全学年男女全種目（96 項目）のうち都平均以上のものは７項目	家庭・地域との緊密な連携のもと、スポーツ志向を高めることを第一に考えながら、改善に努めていく。	△
教員の体育指導力の向上	・体育実技研修会を年２回実施	・２領域以上で実技研修会 ・自主研修会で体育研修実施	・体育実技研修会を２回実施	児童の体力向上が本校の大きな課題であることを踏まえ、今後も教員の体育指導力向上につながる取組も充実に努めたい。	○
「学校で朝ごはん」の計画的実施	・栄養バランスのとれた朝食で一日をスタートする習慣を身に付けさせるため、年間６回以上「学校で朝ごはん」を実施	・民間企業からの支援金を活用し食材を購入し、地域ボランティアの方の調理による朝ごはんを提供(全校を２グループに分け、希望する児童を対象に実施)	・地域ボランティアの支援のもと、計画通りに年間６回実施	特色ある取組として本校になくてはならないものとなっている。バランスのよい食事の大切さについて学ぶ機会としてだけではなく、感謝の気持ちを育む等、心の育成のよき機会となっている。	◎
いじめの早期解決	・いじめ防止研修年２回以上、Hyper-QU 研修会年１回以上実施 ・把握したいじめを１週間以内に一覧表に入力、４か月以内に解消	・いじめ防止研修会と Hyper-QU 研修会を前期中に実施 ・毎月の生活指導全体会でいじめに関する案件を把握	・個別演習も含めていじめ防止研修を年３回実施 ・把握したいじめを１週間以内に入力を徹底、10 月までに発生した事案を全て４か月以内に解消	いじめ防止基本方針の改訂、保護者・地域向けパンフレットの作成を行うなど、一体的な取組を確実に実施することができた。	◎

６　まとめ

（１）今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

今年度は「一人一人を大切に！ All For Students 全ては子供たちのために」の基本理念のもと、①ＩＣＴの利活用を通した「指導の個別化」と「学習の個性化」の推進、②環境や人材等を生かした体験活動の「質」と「実」の充実、③安全・安心の徹底と「コロナ・ブランク」の積極的な解消の３つを柱に教育活動を実施した。特に、全校で「始める」「続ける」「遂げる」の推進と「足立(Adachi)入谷(Iriya)」のＡ（active⇒活動的な、積極的な、能動的な、活発な）とＩ（interactive⇒相互に作用する、双方向の、対話型の）の充実に努めた。また、前年度の文部科学省リーディング DX スクール事スクール事業連携協力校としての実践を生かしながら、教育活動、学校運営のいずれにおいても「Small, but Smart!（小規模でも、高機能！）な学校づくり」に取り組むことができた。

【「学力向上アクションプラン)」について】

区調査（２～６年）では、国語は通過率 79.2％と、昨年度より 3.9 ポイント上昇し、目標の 80％に近づくことができた。算数は通過率 82.4％で、昨年度より 4.6 ポイント低下したものの目標の 80％は達成できたが、高学年での平均正答率・通過率の低下が顕著であった。国調査（６年）の平均正答率は、全国平均と比べて国語が-12.0 ポイント、算数-9.0 ポイントと、乖離が大きかった。

＜課題＞

区調査の国語では、正答率が教科総合、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」で区平均を下回り、特に、「書くこと」の課題が顕著であった。全校で語彙を豊かにする指導の充実と、書くことの習慣化を図る必要がある。算数の領域別正答率では、「図形」で区平均との差がやや顕著であった。また、高学年での平均正答率・通過率の低下が大きかった。個別最適な学びの充実を通して改善を図っていく必要がある。学習意識については、「宿題がないときでも家で勉強する」は区平均を 6.1 ポイント、昨年度を 1.0 ポイント、「１ヶ月に本を２冊以上読む」は区平均を 13.9 ポイント、昨年度を 16.9 ポイント、「勉強が好きだ」は区平均を 8.0 ポイント、昨年度を 16.9 ポイント、それぞれ下回った。学びに向かう姿勢を高めることと、学習習慣の確実な定着が課題である。

＜対策＞

○毎週の「作文タイム」で低学年 50 文字程度、中学年以上 100 文字程度の作文に取り組ませ、書くことへの意欲と表現力の向上を図る。
○第１学年を対象に多層指導モデル MIM（毎月）と音読力チェック（年２回）を実施し、流暢な読みの定着を図る。
○各教科で AI ドリルやドリル教材を計画的に活用し、スモールステップでの反復学習を徹底するとともに、初期の段階、小さな段階でのつまずきの解消を図る。
○一人一台のタブレットを活用した「調べる」「まとめる」「発表する」などの学習に積極的に取り組ませる。また、個々の ICT 活用力向上を確実に学習意欲の喚起につなげていく。
○学校独自の漢字検定・算数検定（Ａ☆Ｉ検定）を実施し、基礎的な内容の定着を図るとともに、満足感や達成感を味わわせる機会とする。
○宿題とは別に自ら考えた課題についての家庭学習に取り組ませ、課題設定や課題解決の自主性・主体性の向上に努める。

【「教員各自の専門性の向上」について】

理科・生活科の校内研究では、「①日常的な場面や、道具を使った体験活動を通して自然や事象と出会い、向き合うことで、対象となる事象への興味・関心が生まれ、探究心が高まり、自ら問題を解決する力を育むことができるだろう。」「②ＩＣＴ等も活用しながら、問題を共有し、ともに調べ、考察し、表現し合う経験を積み重ねることで、自然事象に対する見方・考え方や学びに向かう姿を高めることができるだろう。」という研究仮説のもと、研究主題「自ら問題を見出すことができる児童の育成～協働的な学びを通して～」に迫ることができた。また、計画的な研修の実施を通して、教員一人一人の指導力向上に努めるとともに、ICT 利活用の促進、クラウド機能を活用した校務改善等を図ることができた。今後も、学校を挙げて教員各自の専門性の向上に努めていきたい。

【「心身の健康づくり」について】

児童の体力・運動能力については、体力調査の総合評価（５段階）で、上位層（A＋B）が 6.3％なのに対して、下位層（D＋E）は 63.2％と、全体的な低下傾向が顕著である。家庭・地域との緊密な連携のもと、児童に体を動かすことの楽しさ、大切さを実感させるとともに、運動機会のさらなる確保と質の向上を学校の重点課題として児童一人一人の「スポーツ志向」を確実に高めていきたい。また、「生活習慣アンケート」の結果を生かしながら家庭との連携・協働の強化に努め、望ましい生活習慣の確立とその継続を図りたい。いじめ対策については、未然防止・早期発見・早期対応・早期解決のさらなる徹底を図るとともに、児童の自主的・主体的な取組の充実と、保護者・地域の「いじめ防止基本方針」に対する理解深化に努めていきたい。

（２）保護者や地域へのメッセージ

本年度も本校の教育活動並びに学校運営にご理解とご協力をいただき、ありがとうございました。次年度の第１学年の予定児童数は６名。さらに小規模校化が進みますが、皆様との一体感のもと、「Small, but Smart!（小規模でも、高機能！）な学校づくり」を確実に推進していきます。また、コロナの収束を受けて、文化的行事における「学芸会→音楽会→展覧会」のサイクルを復活させたところですが、児童数の減少に対応するとともに、日常の教育活動の発表の場としての位置づけをより明確にするために、次年度以降の文化的行事は「音楽会→展覧会」のパターンで実施することにしました。何卒ご理解ください。そして、現在、児童の登校時間帯は 8:10～8:20 ですが、登校後の動きが慌ただしかったり、Ｂ時程の日に５分休憩を挟んで４時間連続で授業を行ったりと、午前中の時程がタイトな状況があります。このため、次年度からは登校時間帯を５分早めて 8:05～8:15 とします。早く登校して来た児童の待機場所についても、安全確保や入室に要する時間の短縮の意味から中央昇降口外側の犬走りに移動します。ご承知おきください。

（３）その他（学校教育活動全般について）

次年度は早いもので現行学習指導要領の全面実施から６年目となる。改めて「育成を目指す資質・能力の明確化」と「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」に努めながら、教育活動のさらなる充実に努めていきたい。特に、ICT の利活用を通して「指導の個別化」や「学習の個性化」推進を図るとともに、校務改善のツールとしても学校全体により確実に敷衍・浸透させていきたい。